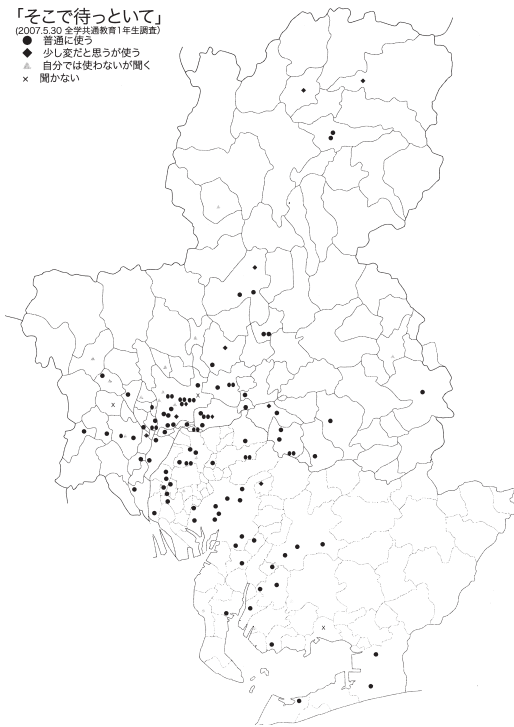


- ⑤ 遅くなると思うで、待っとらんと、先、行っという。(行っておいて)
- ⑥ 遅くなると思うで、待っとかんといて。(待っていないでおいて)
- ⑦ 空港で遅れたら、飛行機、待っというくれなかった。(待っておいてくれなかった)

これらについて、「あなた自身は、地元のことばとして、次のような表現を使いますか。用例は岐阜方言をベースに書いてありますが、()内の共通語を参照し、地元のことばに直して考えてみてください。」との設問形式で、普通に使う、少し変だと思いが使う、自分では使わないが聞く、聞かないのいずれか1つに○を付けてもらう形で問うた。



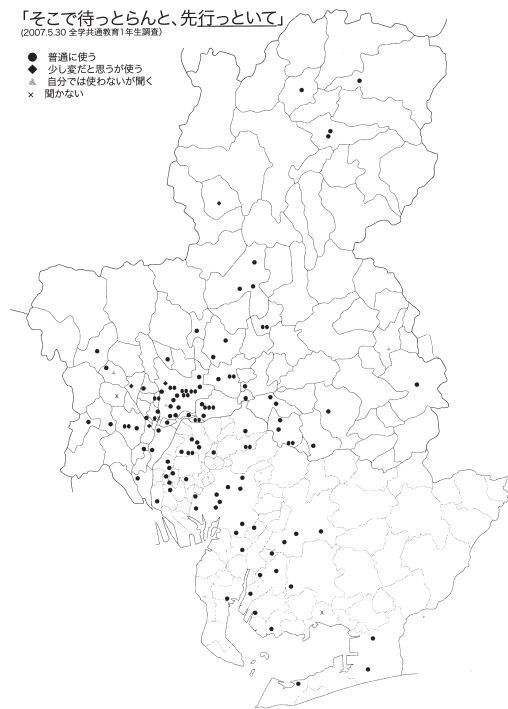
地図2-1 「～ておく」肯定依頼①

従来からの考察で、もっとも使われやすいと思われるのが、行為結果が明確に残る動詞の依頼・命令の形である。左図に示す「そこで待っというて」は、三河から飛騨まで広く使用する実態が見られる反面、地域的に「自分では使わないが聞く▲」「聞かない×」という回答が固まって現れる地域もある。岐阜県では、西濃北部から岐阜市西北部にかけて、この回答がかたまっており、三河では西部に何地点か確認される。

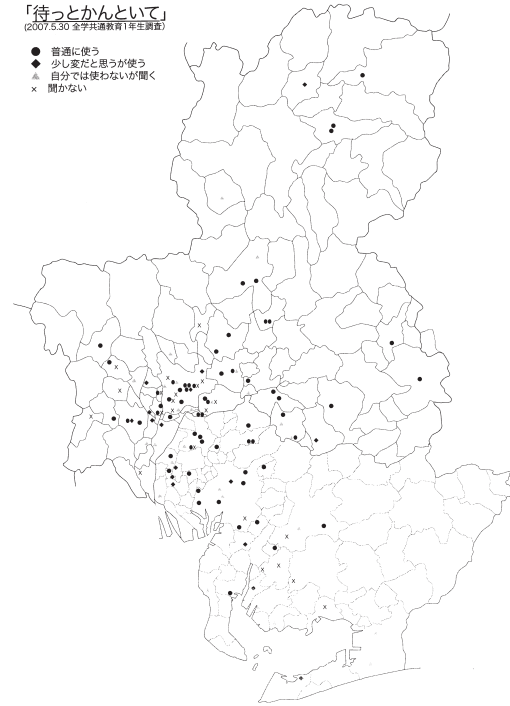
特に岐阜県西部については、このようなテオクの用法が関西方言に多いものであっても、関西地方からの直接的な伝播によって当地でも用いられるようになったということに否定的な証拠と考えることができよう。反面、名古屋のような都市部に使用するという回答が集中して見られることから考えても、マスメディアによる当地への空からの伝播が有力ではないかと考えられる。

命令形については、⑤も同様に高い使用率が認められ、分布も広範囲にわたっている(地図2-2)。⑤の「行っというて」は、①の「待っというて」よりも、西濃北部をはじめやや使用率が高いと見ることができるであろう。このような動詞による差は、もちろん、動詞の性質の差による可能性も考えなければならないが、文法装置としての持続状態の待ち望みという機能を「～というて」が担っているというより、当地においては、特定の語が「～というて」と結びつきやすいという、未だ語彙的段階に留まる可能性も排除できない。

では、否定命令、すなわち禁止の形である「待っとかんといて」に関する地図2-3はどうであろうか。地図2-3に表された「待っとかんといて」は、岐阜市およびその周辺での不使用が目につく。また、三河地方での不使用も顕著である。持続状態の待ち望みが分析的に「～ておく」に付与された機能として当地で用いられるのであれば、①の肯定的依頼と⑥の否定的依頼は基本的には、同様の使用状況として現れることが期待されるが、実際には不均衡な分布を呈している。このことから、(確かに状態として目に見える①と、目に見えない⑤や⑥という違いによって使用率の差が生じていることを完全に否定し得るものではないが)基本としては、「～ておく」が尾張地方を中心に当地に浸透しつつある段階にあることが示唆される。

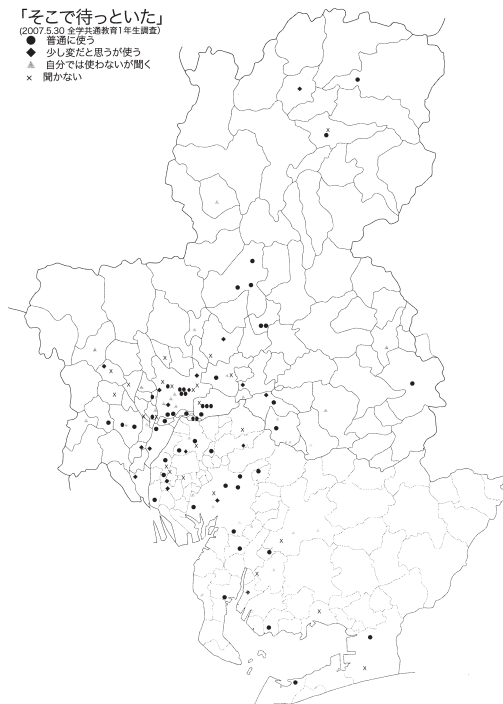


地図 2-2 「～ておく」肯定依頼②



地図 2-3 「～ておく」否定依頼

働きかけのモダリティ以外ではどうであろうか。地図2-4は、叙述の文末で用いられる「待っといた」の分布である。やはり、働きかけのモダリティほどの使用はどの地域においても認められない。

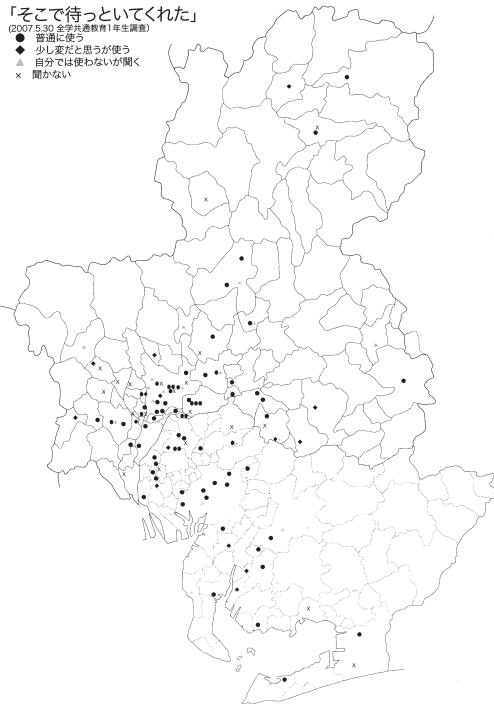


地図 2-4 「～ておく」述べ立て

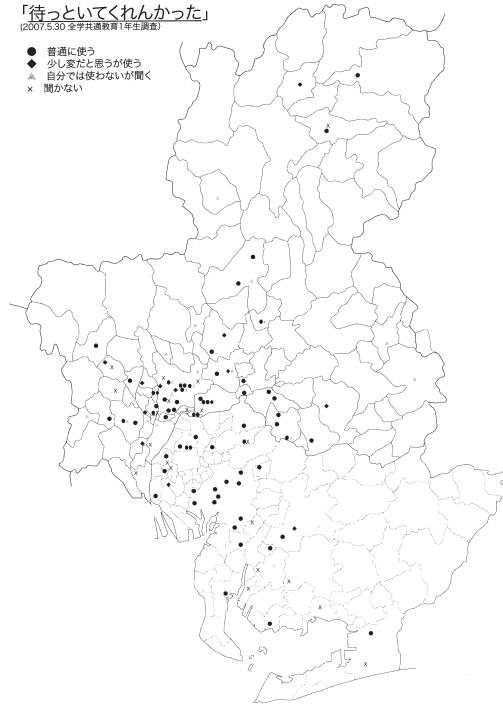
特に、岐阜県内では、西濃北部から岐阜市北部にかけて、×が非常に多く見られ、三河地方西部においても、「自分では使わないが聞く▲」という回答が目立つ。一方で、西濃南部から岐阜市南部、また、離れて、中濃北部などでは「普通に使う●」という回答も少なくない。地域的に違いがあるといつてよい状況であるのかは、今後の詳細な調査に委ねなければならないが、少なくともいくらかは地域的な偏りがあると言つていい状況があることは事実である¹。

論点を元に戻し、叙述のほかの面を見ていこう。叙述として文末に用いる以外で、補助動詞「～てくれる」の内容として捉える場合はどうであろうか。今回は、「待っといてくれた」(地図2-5)と「待っといてくれなかった」(地図2-6)の2つの用法について調べてみた。

¹文法分析において、従来からおこなわれているようなひとりの文法理論家の“感性”による分析は、その中での一貫性という意味ではそれなりの意義は認めるにしても、それだけでは本当の言語の科学とはならない。ことばは社会の共有財産であり、このような点を考慮に入れてはじめて、言語の実態に合った研究となる。

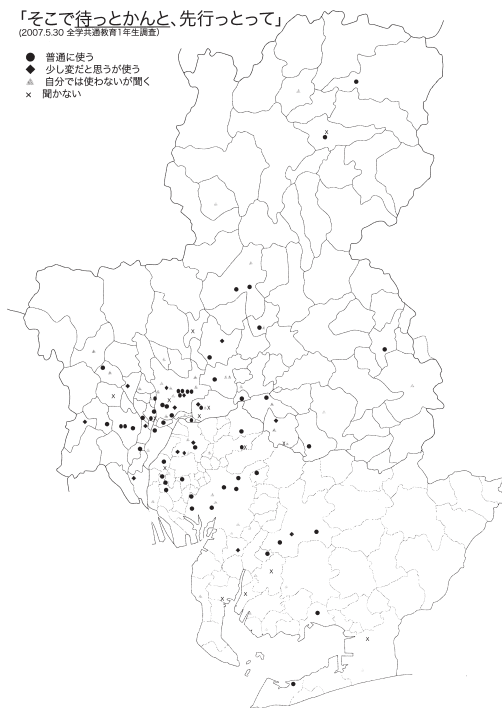


地図 2-5 「～ておく」肯定恩恵



地図 2-6 「～ておく」否定恩恵

「待っといてくれた」も「待っといてくれなかった」も、岐阜県内で大きな差はない。むしろ、違いは愛知県に大きく現れており、愛知県では否定のほうが、全般的に三河西部で×が多くなっている。「～とく」「～てくれる」「ん」に過去という要素が複雑に組み合わされた形式が用いられにくいということは、当該形式のうちのいずれかが三河地方でまだ十分に使いこなされた形式になっていないことを表すものである。



地図 2-7 「～ておく」条件節

最後に、従属節で用いられた場合についてはどうであろうか。ト節で用いられた場合の分布を表した地図2-7は、確かに全地域において地図2-1や2-2のような働きかけのモダリティより「普通に使う●」は少ないが、地図2-4の「待っといいた」よりは多い。

そもそも、過去の出来事としての述べ立ての「待っといいた」は、結果に対する意図を表すのみであり、「待っといいた」のような持続の叙述とは異なりが大きい。一方、働きかけの場合、出来事は未だおこっておらず、「待っといいて」も「待っといいて」も未実現事象の持続要請という点では近似する。このような違いが、基本的な差として地図にも表れてくる。

では、地図2-7に示した「待っとかんと、先行っって。」は、どうであろうか。条件従属節に含まれる点で、述べ立てほど「待っといいた」との違いは際立たない。反面、主文末で働きかけているとは言えない、すなわち未実現を形式として担っていない。地図2-7に表れた述べ立てと働きかけの中間的な様相は、

このような理由によって説明されるであろう。

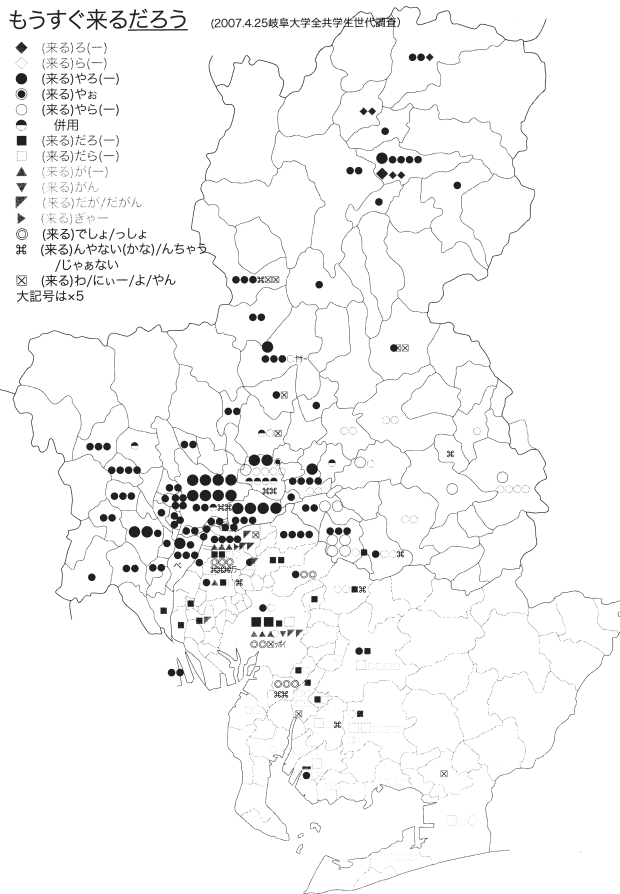
2.2 推量表現

本節では、共通語の「ダロ(-)」に相当する、いわゆる推量表現を見ていく。

推量表現は、指定辞の「ヤ(/ジャ)」「ダ」を含み、東濃南部を除きおおよそ岐阜と愛知の県境を等語線として南北に形式の異なりを呈するが、指定辞部分に「ロー」「ラー」いずれが後接するかでも地域的に異なる。さらに、推量という形式を取らず終助詞を用いる地域もあり、特に、尾張北部に分布する「ガヤ」に由来する「ガ」「ガン」等の諸形式をも見ていく必要がある。

今回は、全学共通教育言語学 I 受講者150名あまりに対し同世代の友人・知人など2, 3名にどのような形式を用いているか調査させた。その結果が地図3である。地図3は、地点と呼ぶにはおおよそ市町村単位での分布を示したものであるが、それでも、次のようなことが見えてくる。

まず、指定辞部分の異なりを見ていくと、●や○で示した「ヤ」を含む地域と、■や□で示した「ダ」の地域が、やはり大きくは岐阜と愛知の県境でおおまかに分かれることがわかる。県境付近を詳細に見れば、犬山市には「ヤロ(-)●」が4回答あり、一宮市や一宮市旧尾西市地区にも「ヤロ(-)●」が見られ、また、「ヤラ(-)○」についても瀬戸市に2回答見られる。尾張地方北部においては、彦坂(1992)や『方言文法全国地図3』(1994)113図に見られた「ジャロー」が、指定辞部分の「ジャ」から「ヤ」への変化によって、共通語あるいはより愛知県的な「ダロー」ではなく、「ヤロー」へと変化したものと考えられる。これは、「ジャラー」から「ヤラ(-)○」への変化が読み取れる瀬戸市でも同様である。この点で、基本的な「ダ」と「ヤ」の統語線は変化していないと言えるであろう。一方、尾張地方南部では、「ヤロ(-)●」が見られず、さらに岐阜県内の海津町においても、今回の調査で「ダロー■」が用いられていることが確認された。この地域では、尾張北部とは異なる指定辞の変化方向性が見取れる。



地図3 推量表現の形式

調査で「ダロー■」が用いられていることが確認された。この地域では、尾張北部とは異なる指定辞の変化方向性が見取れる。

次に、指定辞以外の部分について見ていくと、南北に分かれる「ダ」と「ヤ」と異なり、東西に「ラー」と「ロー」が分布することがはっきりと分かる。岐阜県内では、美濃地方西部に「ヤロ(-)●」が分布し、飛騨にも広範に見られる一方、美濃地方東部と愛知県瀬戸市に「ヤラ(-)○」が分布している。

では、岐阜県内における「ヤロ(-)●」と「ヤラ(-)○」の接点はどこであろうか。地図3からは、東濃地方西部の多治見市あたりまで「ヤロ(-)●」が複数分布する反面、岐阜市に東接する関市で「ヤロ(-)●」と「ヤラ(-)○」は、ほぼ拮抗する状況となっている。特に関市では両形を使用するという回答(●)が4件と、県内でももっとも揺れている地域と

なっている。関市のさらに東の美濃加茂市では「ヤロ(-)●」が数的に優勢(「ヤロ(-)●」9対「ヤラ(-)○」2)となっていることから、完全な統語線が引きにくい漸次的変化の分布となっていることが伺える。なぜ、このような分布になったか。彦坂(1992)では、岐阜市北部から本巣市にかけて「ジャラー」と「ジャロー」が併存する一方、関市近辺では「ヤラ(-)」が優勢であると報告されている。このことから考えると、岐阜市近辺では、近畿地方に大きな基盤を持ち優勢な「ヤロ(-)」に移行していき、一方、関市近辺では「ヤラ(-)」が優勢な勢力を保持したまま現在に至っていると考えるのが妥当であろう。

指定辞部分に「ダ」を用いる愛知県でも、尾張地方の「ダロ(-)■」に対して、三河地方の「ダラ(-)□」と、この東西分布は岐阜県での分布と平行的に見られる。尾張地方の「ダロ(-)■」は、『方言文法全国地図3』113図にも、名古屋市と名古屋市の西の津島市に報告されており、共通語の「ダロ(-)■」と形式的には同じであるが、共通語を取り入れたものではないと考えられる。今回の大学生世代の調査に関し、特に大都市名古屋に関しては、この方言を受け継いだものの他、やはり共通語の「ダロ(-)■」の存在を無視するわけにはいかないであろうが、尾張地方に広く分布する「ダロ(-)■」は、おおよそ旧来の方言形式を受け継いだものと考えてよからう。

指定辞を含まない「(来る)ロー◆」と「(来る)ラー◇」については、この地図から連続性は読み取れないが、当然、これらは長野県に広く「(来る)ズラ」とともに分布する「(来る)ラー」を介して考えれば結びつく可能性がある(江端1977:88, 馬瀬1992:775など参照)。

推量という表現を考える場合に重要なのは、形式としての推量表現だけでなく、その周辺に存在する表現、すなわち、断定としてのゼロ形に何らかの終助詞を添える場合も考慮に入れておくことである。推量形式を用いず終助詞を用いるのは、尾張地方と、数的には少ないが中濃北部と飛騨南部である。

尾張地方では、名古屋に多く見られる「ガ▲」や、若い世代で用いられる「ガン▼」のほか、指定辞「ダ」を介した「(来る)ダガ/ダガン▼」が広く見られる。動詞に直接付加される伝統的な「(来る)ガ」が、なぜ指定辞の「ダ」を介するようになるのであろうか²。この形式が発進力の強い名古屋起源であることは、間違いのないであろう。しかし、名古屋方言に関する網羅的な研究である芥子川(1971:238-240)にも、名詞などに指定辞を介して「ガ」の類が続く例はいくつか見られるが、動詞に指定辞を介した例は見あたらない。伝統的な方言形式と異なる新形であるとすればどのような出自であるのか。

この形式の広がりを見ると、今回の調査に限って言えば名古屋市以南で見られていない。一方、尾張地方北部および西部を見ると、「ダロ(-)■」の分布する一宮市や津島市に「(来る)ダガ/ダガン▼」の分布が見られるが、「ヤロ(-)●」のみが分布する地域で「(来る)ダガ/ダガン▼」が見られたのは、岩倉市のみであった。これだけのデータで断言することはできないが、「ダロ(-)■」と「ガ▲・ガン▼」との混交形である³か、名詞や形容動詞に付く「ダガ/ダガン」が動詞にまで過剰一般化した(またはその両方である)可能性が高い。詳細な報告を待ちたい。

では、愛知県の「(来る)ダガ/ダガン▼」は、本当に推量という機能を有した語形なのであろうか。推量形は、自然下降調イントネーションで、いわゆる推量を表現するほか、上昇調イントネーションでは確認要求という談話機能を担う。今回の調査では、推量表現に限定するために、上昇調ではない

² 今回の調査において、名詞に続く場合と混同した可能性については、インターネットのブログ等でも、動詞に直接「だが(や)」が後接する用例が散見されることから否定される。

(i) 「名古屋に行くだがや」(<http://plaza.rakuten.co.jp/monami0818/diary/200509140001/>)

(ii) 家ンところにもこっそり持って来るだがや。(<http://blogs.yahoo.co.jp/sakulabotan/folder/932526.html>)

³ このような混交は、多くの形式が混在する地域で見られることは、富山県の原因・理由を表す接続助詞の例などにも見られる。

ことを強調して調査をおこなったが、実際には、学生がおこなう際にこのような意図が十分に伝わっていなかった可能性は否定できない。設問の不備も考えなければならない。

もう一カ所、推量の形式を用いない可能性があるのは、美濃市以北の郡上や飛騨南部など、「ワ」や「ニ」「ヨ」など、伝達系の終助詞を伴う地域である。推量とは、所詮、話し手がこうであると考えれば根拠なく判断もできるという点で断定に近い形式であり、その伝達態度のやわらかさが断定との根拠である場合もある。これは、医者が「あなたは風邪でしょう。」ということを考えれば明白である。であれば、あえて「推量」形式を本当に用いる必要がある場合は、実は意外に限定されていると言ったほうがよいのかもしれない。これらの地域での詳細な研究は、推量とは何かを考える上で重要な示唆を与えるものとなる可能性もある。今後の課題としたい。

一方、推量の形式は、イントネーション次第で、聞き手に発話内容を確認する機能を持ちうる。次節では、確認要求の表現を見ていく。

2.3 確認要求表現

共通語において、上昇イントネーションを伴った推量形式「だろう?」や「でしょう?」、または「～じゃないですか」を用いて、話の前提を聞き手に確認しながら会話を進める場合がある。このような確認要求表現の当地での用法について知るために、今回、2つ次のような質問をした。

- (1) 「昨日、雨、降ったじゃない。それなのに帰りに傘を忘れて…」の「じゃない」のように、確認をしながら話を続けるときに使う表現はどれですか。
- a. やん b. やんね c. じゃん, d. じゃんね e. がん f. がー 他_____
- (2) (1)で○ (◎があれば◎)をつけたことばを、「私/おれって、昨日、寝坊した_____。だから、先生に叱られてさ。」のように、聞き手が知らないことにもあなた自身使いますか。1つに○。
- a. 使う, b. 使わない c. ほかの形を使う ⇒ それは何ですか _____

結果は、次の地図4-1および4-2のとおりである(地点は出身小学校によるもの。左下の岐阜市(旧柳津町を除く)については校区ごとの区割りにデータを示す)。

まず、聞き手との共有知識の確認である地図4-1を見ると、岐阜県と愛知県は、おおまかに見て、ヤン系■□□とジャン系●●◎に分たれる。「ヤン■」「ジャン●」は、分析すれば、共通語の「じゃない」に相当し、岐阜県では前節で見た「ジャロ(-)/ジャラ(-)」から「ヤロ(-)/ヤラ(-)」への変化に合わせる形で、ヤの音が用いられている一方、愛知県では、共通語の縮約と同じジャの音が含まれる形式を用いている。

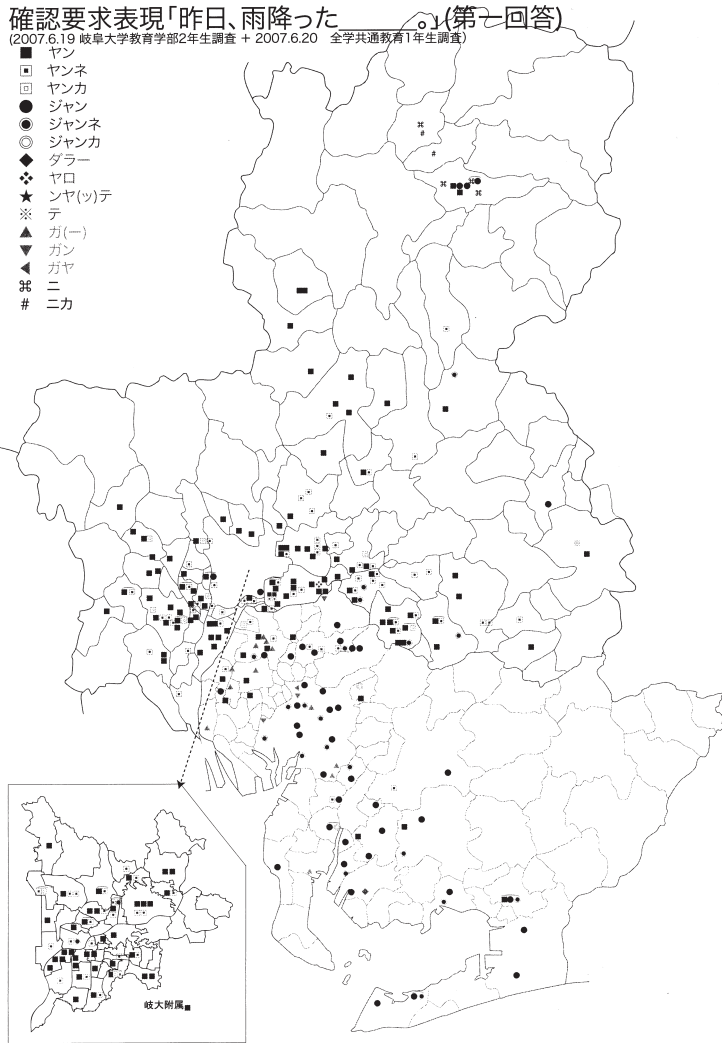
終助詞との組み合わせも合わせて考えると、岐阜県では、郡上市、山県市、羽島市、揖斐郡など、終助詞を伴わない「ヤン■」が密集して分布している地域もあるが、岐阜市をはじめ広くは、「ヤン」と確認要求の終助詞「ネ」との結合形「ヤンネ■」か、あるいは疑問の終助詞「カ」との結合形「ヤンカ□」との併存地域である。独り言にも用いられる「ヤン■」を、聞き手に投げかけることを保証して「ヤンネ■」「ヤンカ□」として表す岐阜県に対し、愛知県では、このような終助詞を伴う地域は、名古屋市周辺などに見られるが、多くは「ジャン●」単独での使用が目立つ。今回は、イントネーションレベルまでの調査をおこなっておらずイントネーションによる聞き手への投げかけ表示の可能性も否定できないが、終助詞の付加において、岐阜県と愛知県では差があるようである。

飛騨に見られる終助詞的小辞の「ニ㊦」、あるいは疑問と結合した「ニカ#」も、その出自はわからないが、「ない」に関連する可能性があるとするれば、同様の発想による形式と考えられる。

終助詞的小辞といえば、尾張地方には、「ガ(-)▲」および「ガン▼」がかたまって見られる。

地図4-1で「ガ(-)▲」および「ガン▼」は、推量表現の地図3とほぼ同じ地区に分布し、割合とし

でも似たような割合で分布している。芥子川 ((1971:238-240) によれば、尾張地方の「ガ」は接続助詞に由来する形式で、特に「がや」は「反語的な意味を表している。用法のいずれもが、『…であろうが、ネ、そうだろう』と話者が確信をもったことを話して相手の同意を求める意になっている(芥子川1971:239)」と述べられており、確認要求機能が本来的にこの「ガ(-)▲」および「ガン▼」には備わっている可能性が、この調査でも表れたと解釈することができる(この点で言えば、前節の「ダガン▼」は、「ダロー」との混交による形式異化の可能性が高いと考えられる)。この点で、共通語でも、推量形式が担う推量と確認要求という2つの機能は、イントネーションレベルでの違いはあれど、やはり近い機能であるということが出来る。



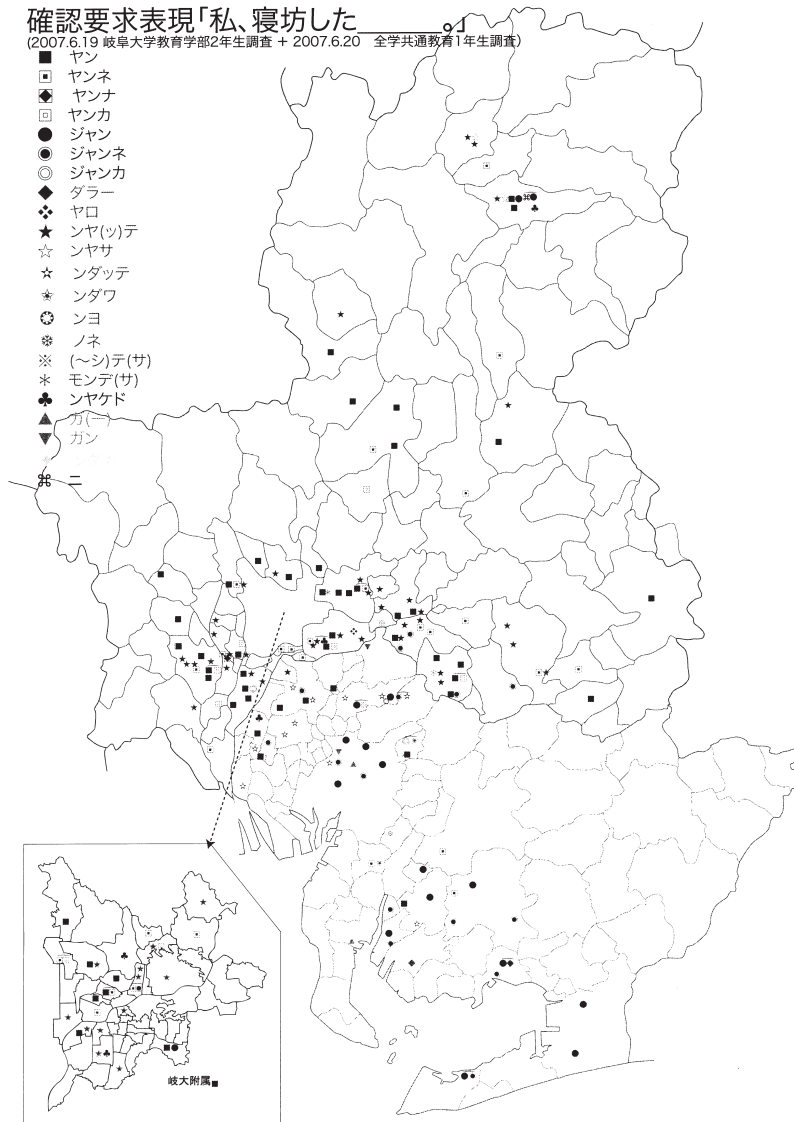
地図 4-1 確認要求表現 (共有知識)

ターンに必要なものとして新規語形を受け入れる必然性があったことになる。これが、当地での語形の地域性の少なさの所以かもしれない。別稿を期したい。

さて、確認要求表現ではもうひとつ聞き手と共有されない自分に関する情報を確認する用法がある。今回は、(1)と同じ形式を用いるか、用いないとすればどのような形式を用いるかを問うた。a (同じ形式を用いる)としたものと、c (異なる形式を用いる)としたもののうちその形式が書いてあったものについて地図化した。(1)と同じ地点に記号がない場合には、地図4-1と異なる形式を用いるがそれが何かは不明であるということを示している。

さて、その推量形式「ダラー◆」「ヤロ◆」は、今回の調査では、わずかに2地点に見られたのみであるが、「ガ(-)▲」「ガン▼」に連続する美濃地方南部と三河地方西部に位置することが興味深い。異なる機能の形式異化の方向性が大勢としてある当地において、この機能未分化な連続体が、名古屋という大都市を中心に見られることは何を示唆するものであろうか。別稿を期したい。

最後にもうひとつ確認しておかなければならないことがある。それは、談話タイプとして、確認要求をおこないながら進める談話自体、当地において伝統的に優勢な方法であったかという点である。もちろん、談話末で聞き手に投げかける場合はあったであろうが、頻繁に聞き手に確認をしながら話を進める方法は、資料が十分でない中での岐阜の印象として、老年層の談話で、現在の若年層ほど多くない。であるとすれば、新規の談話パ



地図 4-2 確認要求表現 (非共有知識)

地図4-2によると、愛知県では三河地方において「ジャン●」が地図4-1とほぼ同様に分布し、名古屋市北部でもその傾向が見られるのに対し、名古屋市南部から尾張地方東部の豊明市や大府市・東浦町にかけて「ジャン●」が見られない。代替語形については今回の調査では多くの情報が得られておらず正確なことは言えないが、「ジャン●」がもつ確認要求の内容が、共有知識のみに限られるかあるいは話し手のみが有するものにも広がりをもつのかは、地域差があると言ってよいであろう。

尾張北部に目を移すと、「ジャン●」は影を潜め、それに置き換わるように「ンダッテ★」が広く見られることに気付く。この「ンダッテ★」の「ッテ」は伝達の機能をもち、伝聞とは異なる下降調イントネーションをもつ。もうひとつ重要なのは、地図4-1に見られた「ガ(-)▲」および「ガン▼」が地図4-2に少ないことである。これについては、他の地図も

見た上で後述する。

岐阜県では、やはり「ヤン■」と「ヤンネ▣」が多いが、愛知県尾張地方北部の「ンダッテ★」と指定辞部分が異なるものの連続する「ニヤ(ッ)テ★」も県全域に見られる。この岐阜県の「ヤン■」の用法は、数年前には「三河地方の友だちが、自分のことを『私、寝坊したジャン。』と言うのだが、そんなこと言われても知らない。」という証言も見られたように、非常に近年の変化によって生じたものである可能性が指摘される。

形式として「ヤン」や「ジャン」を用いる関連する表現として、助言をおこなう場合と残念そうに述べる場合の2つを見ていく。質問項目は次のとおりである。

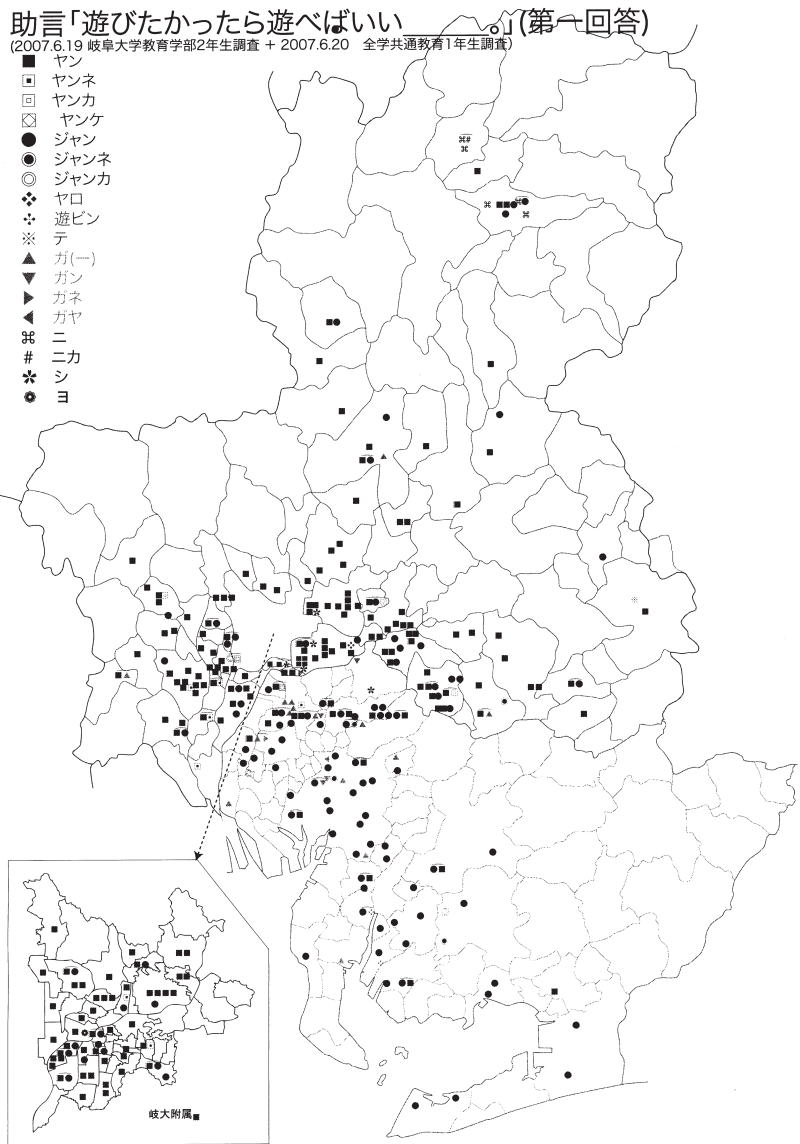
- (3) 聞き手に助言で「遊びたければ、遊べばいい_____。」というときに使うのはどれですか。
 a. やん b. やんね c. じゃん d. じゃんね e. がん f. がー 他_____
- (4) さも残念そうに、「雨、降ってきた_____。」というときに使うのは、どれですか。
 a. やん b. じゃん c. がん d. がー e. げー f. 他_____

(3)を地図化した地図4-3において、おおよそ、岐阜県には「ヤン■」が、愛知県には「ジャン●」が分布している。地図4-1と比較すると、地図4-3では「ヤンネ■」「ヤンカ□」がほとんど見られない。代わりに、地図4-1では岐阜県内に少なかった「ジャン●」が、岐阜市近辺を中心に見られる。このことから、岐阜県では「ジャン」を、確認要求の形式としては受け入れていないが助言に限って受け入れて来ているということがわかる。それはなぜであろうか。それは、確認要求の形式として、岐阜では終助詞の「ネ」や「カ」によって対人的な機能を明示する必要が愛知県と比較してより高いことが関与しているのではないか。そのため、確認要求表現で「ジャン」は木曾川以南の緩衝帯でブロックされたのであろう。岐阜では新奇なものを機能限定しながら受け入れている姿が見て取れる。

地図4-3では、「ガ(-)▲」類の存在も目につく。おおよそ尾張北部での分布は、地図4-1と一致する。「ガ(-)▲」は、「ガヤ」に由来し、前述の芥子川 (1971:239) の記述のとおり、話し手自身の考えを提示し同意を求める形式であるとすれば、助言というよりはやや押し付けがましい感もある。いずれにしても機能の広がりをも有する表現である。

少数派の終助詞では、飛騨の「ニ㊦」「ニカ#」が見られるほか、岐阜と愛知の境界地域である、各務原市、岐南町、関市と愛知県犬山市に「シ*」が何地点か見られる。これは、(4)にも見られる形式である。

その(4)を地図化したのが地図4-4である。ここでも、おおよそ「ヤン■」「ジャン●」の分布は地図4-1と一致し、これらの形式の機能の広がりが見て取れる。一方、岐阜県的美濃加茂市以西の美濃地方南部には、「ゲー◆」が広く分布する。この「ゲー◆」は頻度こそ異なるが、尾張北部から名古屋市、さらには三河地方西部の安城市近辺まで広く分布している形式である。「ゲー」も、歴史的には「ガヤ」が縮約してできたものと考えられており (芥子川1971:240)、その意味では、名古屋周辺尾張地方北部に分布する「ガ(-)▲」をベースにして広がったものと考えてよいであろう。管見の限り資料上、

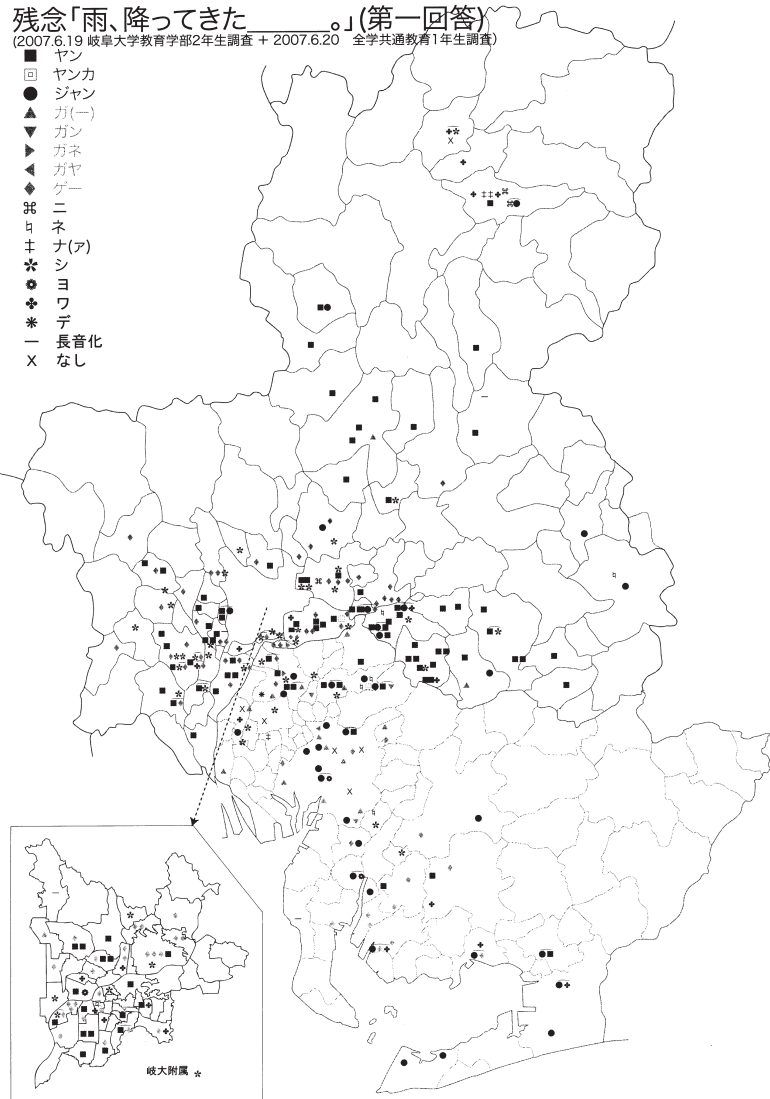


地図4-3 助言表現

「ガ(一)」が確認されない岐阜県においても、不満表明という機能を手に入れそれに特化したことにより、広域に広まったものであると考えられる。

一方で、このような伝達機能は、本来的に終助詞が担うべきものであり、多様な終助詞の使用も確認される。飛騨地方と三河地方南部には「ワ♣」が比較的かたまって見られ、岐阜市およびその周辺にも集中して見られる。しかし、それよりも多いのが「シ*」である。「シ」は、本来、累加の接続助詞であり、当地でもこのような機能で用いられるようになったのは、相対的に見て新しいことである。現在のところ「シ*」の使用される地域は、「ゲー◆」の使用域と、大まかに見て重なっている。このことから考えれば、「シ*」は「ゲー◆」の代替形式である可能性が高い。それは、有声子音と開口の大きな母音を延ばす「ゲー◆」の「汚さ」を避ける意味もある。

まだ過渡的な段階であるこれらの終助詞が今後どのように変化していくかを見ていく必要がある。



地図 4-4 残念表明表現

2.4 否定表現

否定表現については、これまでも山田 (2004, 2005:103-116) などにおいて何度か考察をしてきているが、文法的な特性について中心に見てきており、地理的には大雑把にみただけであった。今回、3世代にわたる調査をおおまかではあるが地図に示すことができたので、それを示しておく。

今回の調査は、最初に学生世代に限定して「食べない」を「食べない」・「食べん」のほかにどうか調査してもらい、翌週にその結果を学生に提示した上で、親世代と祖父母世代に聞いてくるというものであった。もちろん、親や祖父母の世代の人に、出身地を聞いているとはいえ、はえぬきの人であることを限定することはもちろん、外住歴についても不問としてある点で、精度に問題があることは承知の上ではあるが、結果として三世代のデータをおおまかに集めることはできたことで、そこからわかることを述べることのほうが生産的であると考えられる。

なお、老年層データは一部、山田自身の調査結果を含む。

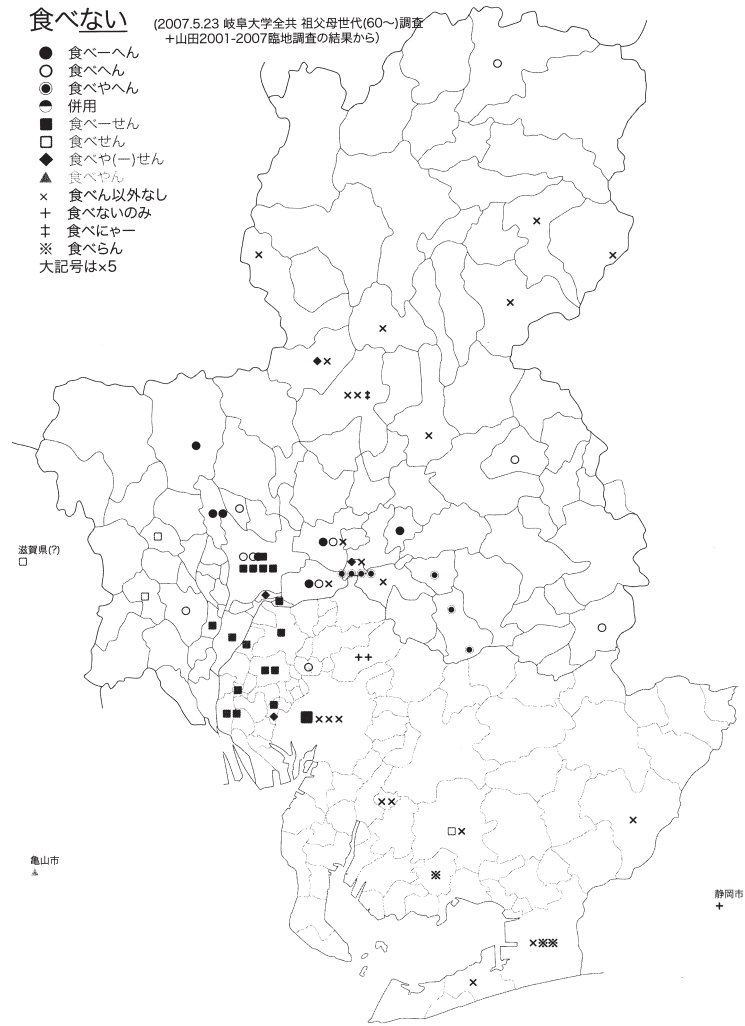
まず、老年層の結果から見ていく。おおよそ岐阜市から南に羽島市、愛知県の一宮市から尾張西部を経て名古屋市まで「食べーせん■」が集中することがまず目を引く。『方言文法全国地図2』(1991)

72図では、岐阜と愛知で「ン」以外の語形が見られるのは、わずか2カ所である。問いの方法が異なることが大きな要因であると考えられるが、『方言文法全国地図2』だけから、岐阜および愛知に「ヘン」や「セン」が存在しないと考えるのは早計である。このような併用が多い場合には特に注意が必要である。瀬戸 (1934) にも、養老郡や不破郡のような西濃地方はもちろんのこと、岐阜市や稲葉郡 (現 岐阜市および各務原市)、山県郡から、可児郡、恵那郡まで「セン」も「ヘン」も記述がなされている上、芥子川 (1971) でも、すでに、江戸時代から名古屋や三河地方には「せん」が存在し、「へん」も名古屋や三河地方における当時の存在が記述されている。もちろん、「食べやしない」のような強意的な意味を持つ場合を除外して考える必要があるが、瀬戸 (1934) にも芥子川 (1971:139ff) にも (後者は「～せん」を「やや否定のしかたがぼやけている。やや婉曲さがある。」とニュアンスの差を指摘はするが)、強意的な意味を含んでいるとの記述はない。今回は、「ン」以外の否定辞を問うており、『方言文法全国地図2』の問かけ方法とは異なる。「セン」や「ヘン」の存在の有無に関しては、今回の調査の方が適切であると考えられる。

さて、分布の考察に戻る。音韻変化で考えると、口腔内での狭窄のない「ヘン」は硬口蓋摩擦音の「セン」より新しい。それが東濃まで分布する反面、岐阜市近辺から名古屋まで「セン■」が分布していることは、京都からより遠い地域により古い語形が存在するという方言圏論から考えると、逆の分布をなしていると言わざるを得ない。では、なぜこのような分布をしているのであろうか。それは、おそらく、名古屋からの再発信によるものであろう。名古屋という大きな勢力が「セン」を保持し、それが、特に羽島など岐阜県南部に再発信されこの地域に残ったものと考えられる。

次に、大学生の親世代の分布 (地図5-2) を見ると、大きく変わったのは、「セン■□」が相対的に見て廃れてきていることである。しかし、音韻変化として「ヘン」へと移行しているかという点、必ずしもそうではない。複数の回答が得られた地域に限ってみても、愛知県は稲沢市や旧尾西市など少数を除いて、「ヘン」も「セン」も使わない「ン」のみ(x)という回答が優勢である状況へと変化をしたことが、地図5-2からわかる。

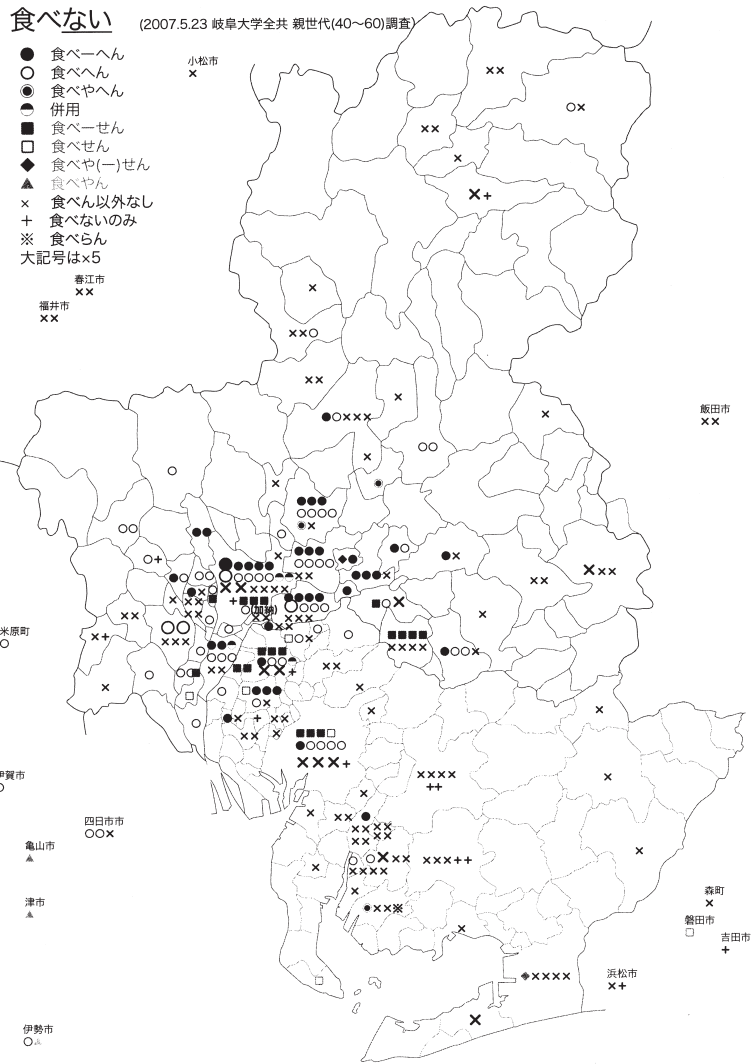
岐阜県内の状況も基本的には同じである。もっとも回答数の多かった岐阜市においては、「食べせ



地図5-1 一段動詞否定表現 (老年層)

ん■」3名、「食べーへん●」が9人、「食べへん○」10名(加納地区としての回答を含む)、併用(●)2名であるのに対し、「食べる」しか用いないという回答が、14名見られた。およそ3分の1強が「ン」しか用いないという回答であったということになる。愛知県ほどの衰退ではないが、確かに「ヘン」も「セン」も使わない傾向が強まっていることがわかる。

なぜ、親世代でこのような「ヘン」も「セン」も使わない傾向が強まったのかについては、次のように推測される。この世代は国語の時間に「方言はだめなことば」という意識を植え付けられ、自分たちのことばを捨てて「標準語」を使うようきつく指導された世代であり、このような方言語形の衰退は教育の成果の可能性もある。ただし、全国共通語の「ない」ではなく、西日本共通語で文語に支えられた「ン」を使うところが、やはりこの地域らしいと言え言えるであろうか。



地図5-2 一段動詞否定表現(中年層)

最後に大学生世代を見ていこう(地図5-3)。

さすがに、「セン」は少なくなるが、ここで革命的な差異化が生じた。愛知県では「セン」も「ヘン」も使わなくなり、大学生世代でも「ン」のみ(×)という回答が増加する傾向であるのに対し、岐阜県では「ヘン」が増え始めているのである。たとえば、岐阜市においては、「食べーせん」2名、「食べーへん」9名、「食べへん」36名、「食べーへん/食べへん」併用2名に対し、「ン」のみと回答したのはわずか5名、1割弱に留まった。3分の1強が「ン」のみを用いると回答した親世代より「ヘン」を用いる率が高くなっているのである。

その理由は、もちろん、方言の授業を受講している岐大生による調査であることを忘れてはいけないが、それだけではないだろう。むしろ、関西という大きな勢力を背景に、否定表現に関しては、岐阜は愛知と一線を画そうとしている様子と捉えた方が適切であろう。

3世代の変化を見ることによって、岐阜県での否定表現は、名古屋の影響下にあったものが、次第に一線を画し独自の表現を用いる方向へと動こうとしている様子が窺えた。

さて、「書かへん」のような五段動詞ではなく、一段動詞において調査をした理由がもうひとつある。「ヘン」については、2音節以上の(学校文法のような活用語尾のために一音節を用いる語幹で

はなく、不変部分という意味の) 語幹を持つ一段動詞が、「ヘン」の前に一音節分の長音拍を保持するか否かという点が問題となる。「食べる」で言えば、「食べーへん」と「食べへん」である。

「食べ(-)へん」が「食べやせぬ」に由来することを考えれば、「食べーへん」と長音拍を保持するほうがより古い語形であり、「食べへん」は関西方言に見られる短縮形と考えられる。岐阜県内では、「食べへん○」は確かに西濃地方に多いとは言え、老年層においても県内各地に散見される語形である。一方の「食べーへん●」は、やはり大学生世代においても岐阜市などの中濃地方を中心に衰退したとは言いきれない様相を呈している。

この点については、すでに山田(2004)で岐阜市の世代別調査をもとに述べたので繰り返さないが、今回の3世代に渡る調査を描いた地図からも、「食べーへん●」と「食べへん○」は、決して、一方向だけに変化する様相は見せないことは事実のよう

である。もし、変化の方向性を見るのであれば、継続して調査をおこなっていくことが必要であり、そのことによって、いくつかの形式が併存する場合の変化の方向性がより明らかになっていくであろう。

2.5 進行相形式

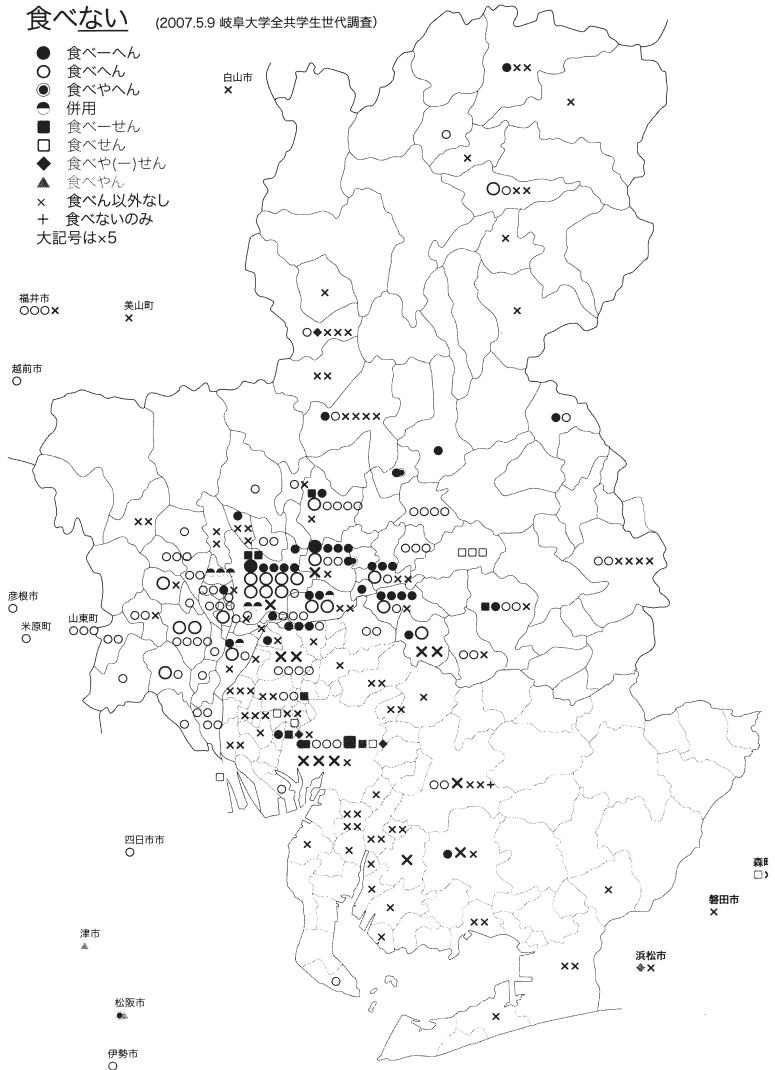
文法形式として最後に、「雨が降っている」のような進行相の形式を見ていく。

瀬戸(1934)では、「ヨル」を用いる地域として、恵那や可児のような、今日でも「ヨル」をよく耳にする地域はもちろんであるが、現在、岐阜市や各務原市になっている旧稲葉郡でも「いきょうる」のような語形が記述されている。このような変化を探るため、今回は、大学生に、祖父母世代と親世代の2世代の調査をおこなわせた。

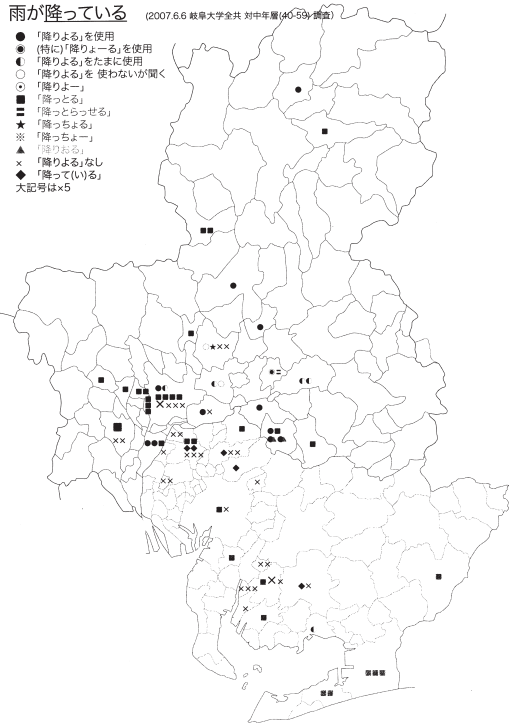
質問は、次の通りである。

できるだけ年配の人に「雨が降っている」を、(悪いニュアンスを込めないで)「雨がふりよる/降りょーる」というか聞いてみよう。(山田2007a:47)

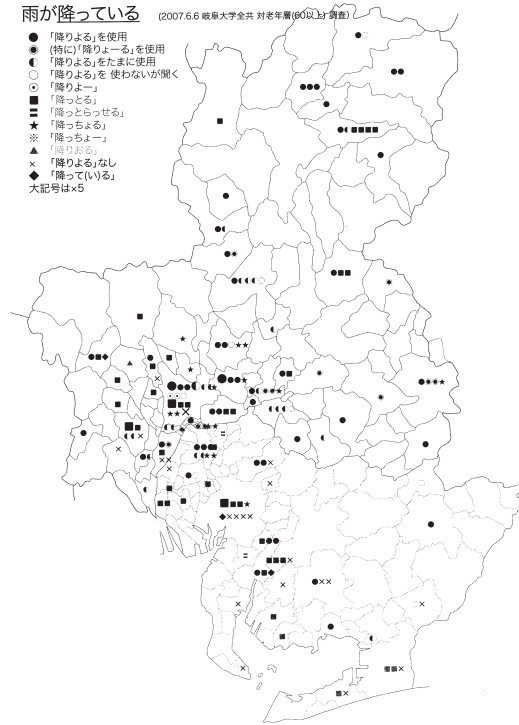
以上の書かれた質問に加えて、口頭で「言わない場合に代わりに何というか聞いてみる」ことを指示した。結果は次のとおりである。



地図5-3 一段動詞否定表現(若年層)



地図 6 - 1 進行相表現形式 (老年層)



地図 6 - 2 進行相表現形式 (中年層)

まず老年層を見ると、今回の調査においては、「ヨル●」は、岐阜市のみならず愛知県内でもかなり広域に見られた。これらは、他の先行研究から得られている知見とは食い違う部分が含まれており、吟味する必要がある。

まず、愛知県内で確認された「ヨル●」についてであるが、『方言文法全国地図4』(1999)198図では、三河地方北部の岐阜県境に併用語形として見られ、今回、確認された設楽町の●と豊田市旧稲武町地区の○はその地域の回答として認めてよいが、他に愛知県内に「ヨル●」は見られない。しかし、山田・山口・鏡味(1992:260)には、「ヨル●」および「～オル」が、「愛知県尾張の中、東部から岐阜県の西濃地方、三重県の北牟婁郡辺りが目に付く」とあり、愛知県内での使用が、否定の「ヘン」同様、『方言文法全国地図』では拾われなかったが存在している可能性が高いと考えられる⁴。

一方、三河地方南部に関して、今回、刈谷市、岡崎市、蒲郡市、小坂井町で確認された。尾張地方の豊明市でも確認されている。三河の「ヨル」については、吉川・山口(1972:149-150,196-197)によると、豊橋を除く三河地方に存在する(した)と読める記述が見られる。また、愛知県教育委員会(1985:94)に、岡崎市北部の談話資料の特徴として、進行の「オル/ヨル」の存在が記述されている。これ以上の資料は現在手元に持ち合わせておらず、なお詳細な調査が必要であるが、『方言文法全国地図4』(1999)の結果だけで愛知県三河地方の「ヨル」の非存在を述べることはかなり危険なことであることがわかる。今回の調査結果は、この地方の「ヨル」の存在を再確認するものとなった可能性が高い。なお、名古屋市には見られないことは、芥子川(1971)に名古屋方言として「ヨル」の記

⁴もちろん、このような結果によって『方言文法全国地図』の価値が低められるわけではない。今回の調査では「ヨル」の存在に絞って質問をしており、そもそも『方言文法全国地図4』198図の「桜の花が、今、散っている最中だ」とします。それを見て、「今、花がチッテイル」と言いますか、「チリヨル」と言いますか、それとも別の言いかたをしますか。(ゴシックは原文通り)」という問いとは質問自体が異なる。しかしながら、『方言文法全国地図』の結果には、その他の語形が存在しないという保証がなされていない点には十分注意をして見ていく必要があることは、今回の調査からも示唆される。

述は見あたらないことと符合したものである。

さて、岐阜市近辺についてはどうであろうか。岐阜市北部出身の筆者自身、進行相語形としての「ヨル」について明確な記憶はない。しかしながら、瀬戸 (1934) では、現在岐阜市と各務原市に編入されている稲葉郡に関する記述において「いきょうる」と「ヨル」を含む語形が確認されている。

ただ、いずれも、老年層の被調査者が、特に、西濃地方の「ヨル●」など、関西方言で聞かれる軽卑的な「ヨル」との区別を厳密におこなわないで使用すると回答した可能性もなくはない。このような学生を教育しながらの調査をいかに厳密になすかが今後の課題である。

3. 社会的関係を表す表現

人が言語をどのように用いるかは、昨今の言語学でもきわめて関心の高いテーマである。

言及する人物あるいは聞き手に応じてどのようなことばを用いるかについては、これまでも敬語の語形を中心に研究されてきたことであり、このような社会に存在するさまざまなグループとの関係を見ていく必要が、言語地理学的研究においても、ますます出てくるであろう。また、形式としてその地域に存在することが、必ずしも、その地域でいつも用いられているということを表すわけではない。場面ごとの使用について見ていくことも重要になってくる。

今回は、社会との関係において、自称詞と対称詞を取り上げ、性差という要因を入れた分析をおこなうほか、人生において使わない人はいないであろう「ありがとう」ということばについて、実際に、「喫茶店やレストランを出るときお客が用いる」という場面に限定して、その使用の有無を探ってみる。

3.1 自称詞と対称詞

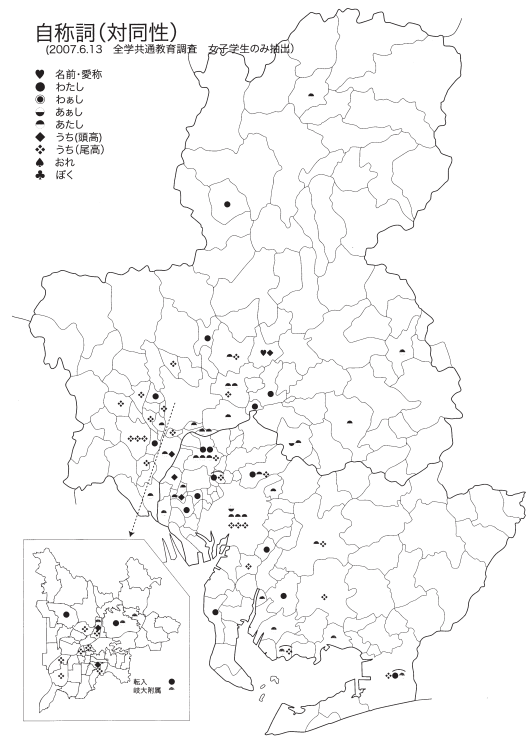
岐阜および愛知の若者は、自分自身および目の前にいる相手をどのように呼ぶのであろうか。

岐阜方言では、老年層でも聞かれなくなってきた伝統的な「わっち」に変わる方言特有の自称詞として、長い間、共通語と同じ「わたし」や「ぼく」等が用いられてきた。しかし、この数年、特に、女子学生の間で、「あし」のような語形が大学生世代に見られたかと思うと、それも廃れ、「うち」が台頭するという変化が見られた。

今回、特に、女子学生の用いる自称詞と対称詞について調査をおこなったので地図に表す。まず、女子学生が同性の聞き手に対し、自分自身を指して用いることばの分布を見てみる (地図7-1)。

さて、地図7-1によると、「うち◆」は、飛騨、東濃、郡上を除き、岐阜県南西部に広く分布し、愛知県内でも静岡県境の豊橋まで分布している。特に、岐阜県西濃地方においては、もっとも一般的な自称詞として捉えられるほどのかたまった分布が確認できる。左下に拡大し取り出した岐阜市内では、今回の調査から、「うち◆」はおおよそ南北に岐阜市を二分する長良川以南に集中し、岐阜市北部の「わたし●」「あし○」を脅かす勢いを見せている。

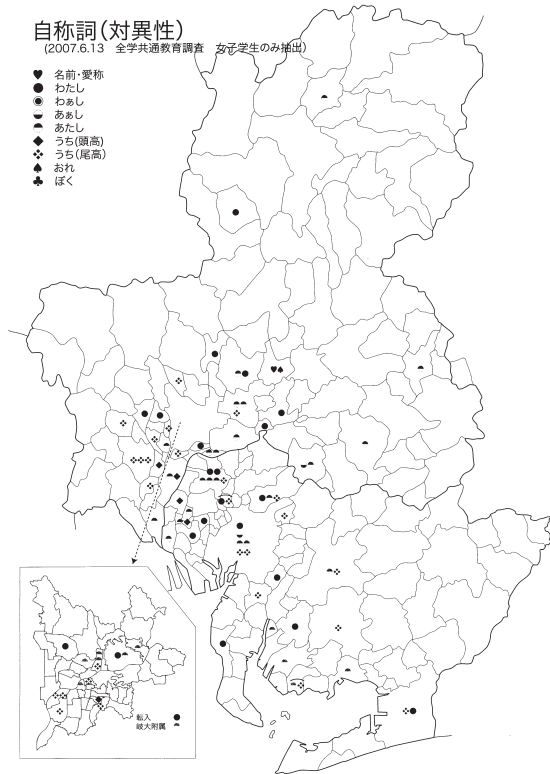
では、この「うち」は、はたして、関西起源のものが徐々にこの地方に入ってきていると考えてよいであろうか。



地図7-1 自称詞 (対同性)

アクセントに関して言えば、関西のものと同じ頭高型の「うち◆」は三重県に近い愛知県尾張西部ならびに岐阜県内で少数地点見られるが一般的であるとはいえない。むしろ尾高型の「うち◆」が広く分布している。では、関西から直接、地上を伝って伝播したのではないのかということも言い切れない。アクセントが異なる地域への語形伝播の際、その語形は当地のアクセントの原型とも言えるものにはめ込んで受け入れられるからである。岐阜県西濃地方から岐阜市にかけては、これだけ地理的にまとまった分布を呈することから、関西地方からの直接的流入の可能性は高い。

一方、愛知県では、近接する地域に「うち」を用いる地域があることから、受け入れる素地はでき



地図7-2 自称詞(対異性)

ているが、一律の流入が始まっているとは捉えにくくばらつき具合が地図7-1からは見られる⁵。また、尾張西部に防波堤のように分布する「うち◆」を考慮に入れば、愛知県の「うち」の広がり、岐阜とは異なる伝播を考える必要がある。今後の課題として残る問題である。

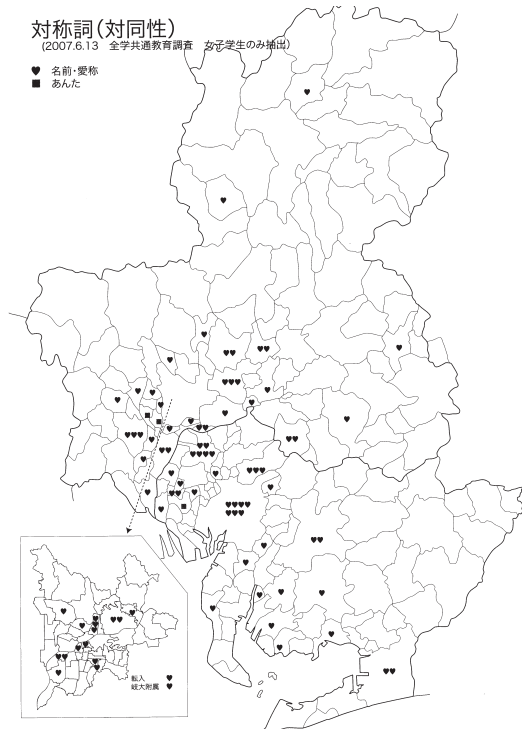
異性に対する自称詞に関する結果(地図7-2)は、地図7-1とほとんど差が現れなかった。ただ、対同性に「うち」を用い対異性に「あたし」系の語形を用いるものが5名見られた(対同性に「あたし」系を用い対異性に「うち」を用いるのは1名だけであった)。

このことから、次のことがわかる。まず、相手が同性であろうと異性であろうと、自分の呼び方は変えないことが基本としてある。その上で、一部に、やはり異性に対しては丁寧に見られたいという意識があるとすれば、「うち」にはややくだけたことばであるというイメージがあるということになる。ただし、今回の調査では具体的にどのような相手を想像したかまでは尋ねていない点は注意を必要とする。

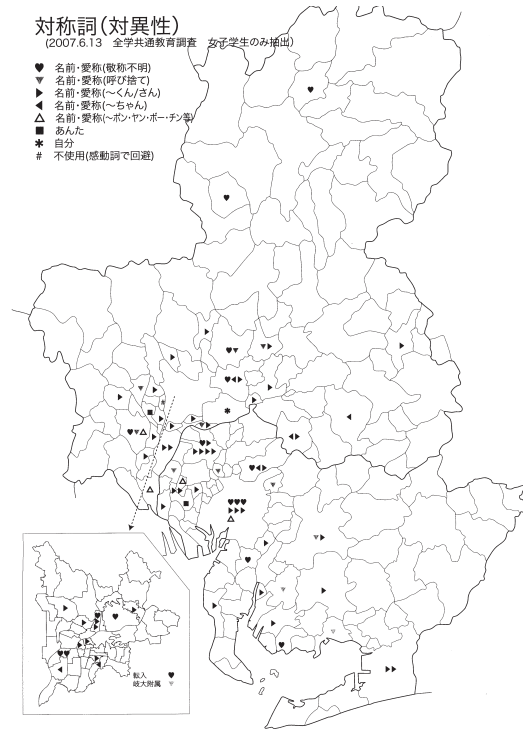
対称詞に関しては、二人称の代名詞的表現がほとんど見られず、女子の場合、岐阜県で56名中54名、愛知県で36名中35名が対者の名前と呼んでいるという実態が確認された。名前を用いることは、対者を自分との関係において位置づけることを避ける効果があると考えられる。英語の二人称代名詞youのような働きに近い形へと変化していくのであろうか。

県別の特徴を見ると、対同性の場合も対異性の場合も愛知県ではまったく変わらないのに対し、岐阜県では対異性の場合に「ジブン」を用いる例や「ネエネエ」と対者を指すことば自体を用いることを回避するなどの回答も見られた。愛知県出身の学生よりも岐阜県出身の学生のほうが、異性に対してやや慣れていないという傾向として見ることができようか。

⁵当然、調査対象者となっている学生たちは、岐阜へと通学しており、その受け止め方が異なることも予想される。しかし、調査時には「地元での形式を回答するように」と呼びかけており、ここまで広範囲に分布が確認されることは、単に岐阜で仕入れたというだけではないと考えられる。



地図7-3 対称詞(対同性)



地図7-4 対称詞(対異性)

対異性の地図7-4において地図7-3と記号を変えてあるのは、女子学生が男子学生の友人をどのように呼ぶかの詳細を、「～さん」や「～くん」「～ちゃん」などの敬称部分まで含めて示すことで、意識を探ろうとしたためである。もちろん、話者本人の性格の違いに加え、具体的に想定する友人の親しさによって大きな違いも考えられるが、呼び捨て14名、「～くん/～さん」付け56名、「～ちゃん」付け6名という結果が得られた。実に、呼び捨て率は2割近い。今回、地図には表していないが、男子が女子を呼ぶ場合には、呼び捨て3名、「～くん/～さん」付け24名、「～ちゃん」付け4名と、呼び捨て率が1割にも満たない。つまり、女子学生のほうが男子学生以上に呼び捨て率が高いのである。

なお、男子の場合、岐阜・愛知を合わせた数で、対同性については38名中30名が名前で呼び、8名が主に「オマエ」という対象詞を用いている反面、対異性については、38名4名が「オマエ」「ソッチ」「ネーサン(2)」を用いるほかの34名が名前を用いるという結果であった。

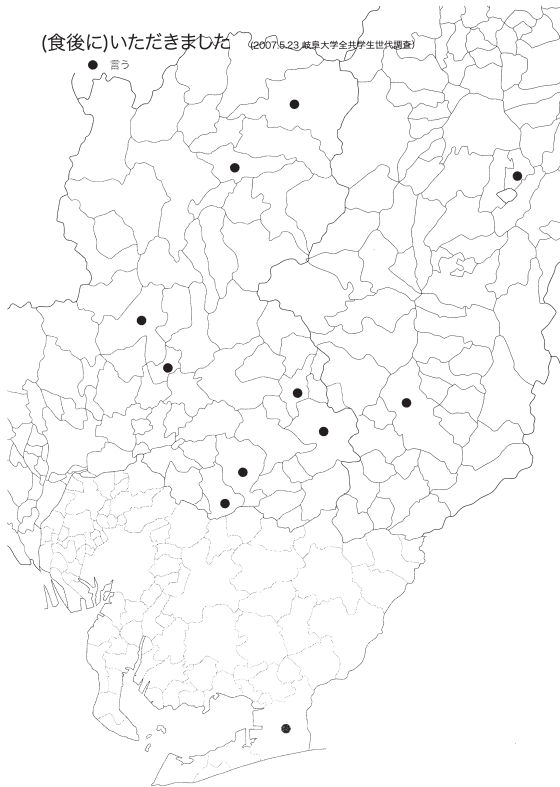
3.2 あいさつ表現

最後に、あいさつの表現を2つ見ていく。

ひとつは、真田 (2002:91-93) でも述べられている食後の挨拶で「いただきました」という箇所を地図にしてみたものである (地図8-1)。

この結果を真田 (2002:92) の地図と比較すると、中濃地方で郡上市八幡町ならびに関市上之保地区で分布が確認されていることと、愛知県尾張地方では今回確認されなかったことが、異なる点として挙げられるであろう。中濃地方では、隣接する加茂郡東白川村の小学校で、筆者自身も「いただきました。」のかけ声を給食後に当番がおこなっていることを目にしてきており、現在でもおこなわれている言語習慣であることが確かめられている。一方、愛知県尾張地方に関しては、調査の年代の違いであることも可能性として残る。尾張地方で早くに消滅したのであれば、それは都市化の影響が考えられるであろう。

しかし、第2節でも触れたが、従来、共通語のある語形に対応する方言語形を収集してきた方言地理学的研究も、もう少し視野を広げて調査をする必要がある。そのひとつに、言語運用、とくに各種



地図 8-1 「いただきます」

る可能性もある。精度を上げて調査をする必要もあろう。

次に、当地の分布を見てみると、地図8-3のようになった(男女の違いが明確にわかるほど、均等なデータが得られたともいいがたいため、その点には言及しない)。

結果は、岐阜市や名古屋市といった都市部で「聞かない×」が多いという結果になっているが、東濃や飛騨、また中濃などでは、全般的に「言う●」が多くなった。これは都市部の人間関係が希薄であるという、よく聞かれる議論の中で説明が可能な部分であると考えられる。

一方、知多半島および三河地方では、岡崎市を除いて、複数のデータが得られた箇所においては、全般的に「聞かない×」が多く見られた。この地図から見る限り、愛知県尾張地方から岐阜県全域にかけて、特に都市部を除いて、この地域では、客が「ありがとう」という習慣が一般的であるということが言えそうである。

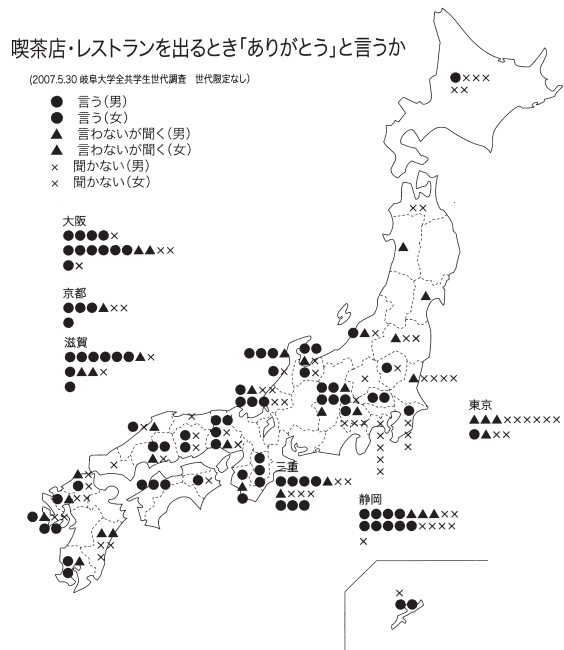
方言研究の流れは、地域の違いによる形式の有無や異なりを問うものから、より社会との関連性を入れた研究へと移ろうとしている。今後、これまで以上に調査がなされるべきは、このような、人がどのようにことばを運用しているかの部分であり、その地理的研究は、条件が付けば付くほど各地点での回答を均質なものにすることが難しいかもしれないが、より望まれるものとなっていく

場面でどのようなことばを用いるか(あるいは用いないか)が挙げられる。

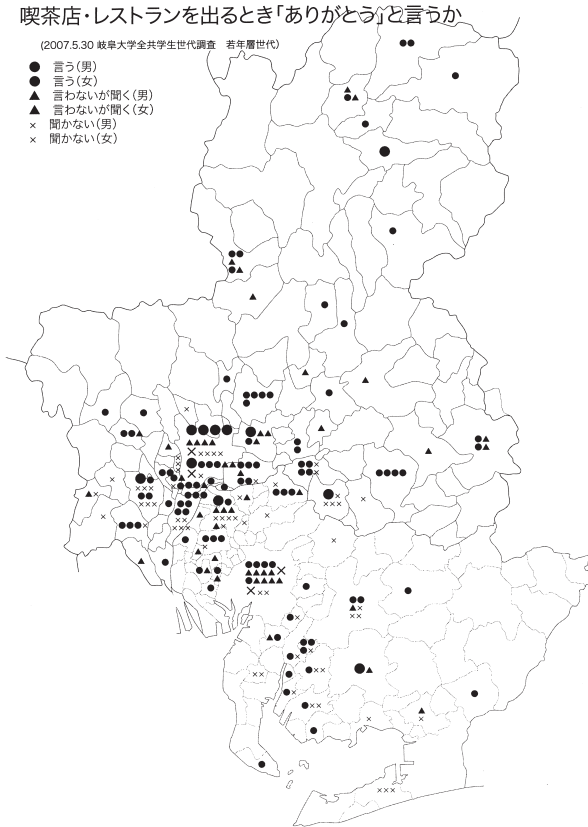
今回は、その端緒として「喫茶店やレストランを出るときに客側が『ありがとう』というか」について調査をおこなった。これは、単に「ありがとう」という形式を「おおきに」や「どうも」など、形式としてどのように言うかではなく、特定の場面においてそのような挨拶が存在するかどうかを問うものである。●は「言う」、▲は「言わないが聞く」、×は「聞かない」であり、インターネットからダウンロードできるカラー版では男女別に示してある。

まず、日本全国での分布を見てみる。

地図8-2に示した地図で見ると、このような場面で「ありがとう」を用いるのは、西高東低の分布をなしていることがわかる。実際には回答数が少ないため確実なことは言えないが、東北地方や関東地方には、男女を問わず×が多く見られる。一方、中部地方以西は「ありがとう」を多く用いるという様相が見て取れる。ただし、九州ではやや×が多く、東西差ではなく周圈的分布をしている



地図 8-2 客の「ありがとう」(全国)



地図8-3 客の「ありがとう」(岐阜・愛知)

のデータを示した地図はほかにほとんどないことである。もちろん、被調査者がまずありきの状況から、十分すぎるデータが集まる地域から非常にデータが希薄である地域までの開きが大きく、まんべんなくインフォーマントが得られるような大がかりの調査ほどの精度を得られていない点も事実として認めざるを得ない。

文法形式については、その文法形式が特に新しい形式である場合、一つの形式の多様な文環境における性質の違いを、用法ごとの分布を地図化することで地域ごとに異なる形式の受容段階から探ることでもわかることもある。用法が複雑である形式の場合には、このような方法も一案かと考える。

一方で、従来からの研究ではなされていないような質問項目を調査できたことも、成果の一つとして挙げられるであろう。特に、社会のより多くの人がいくつかのグループに同時に所属しながら生活を営むようになり、地域的帰属性の比重も変化した今日において、方言地図は従来のままの方法を踏襲するだけではすでに限界である。そのような中で、社会性の高い語彙は低い語彙とは異なる表示方法が採られるべきであろうし、併用が多い語彙は少ない語彙と同じように地点にプロットしていくわけにはいかず割合で示すことを考える必要もあろう。このような課題も見えてきた。

さらに、前稿(2007b)の最後でも述べたが、学生が毎回調査をおこなうことの効果も重要である。もちろん、一部にはやはり質の保証が十分になされないというデメリットは否めないが、広域で大規模のデータが集約できることのメリットもある。そして何より学生たちの意識の高まりが当地の方言に対する意識の変革にも役立っていることは大きな成果である。地域的観点の育成という点でも、方言を学生自身が調べ考えていくことは、実は、単に出来合いの方言分布図を見るよりも効果的である。

方言研究が一部の研究者の独占物とならず、多くの人の共有財産となるよう、教育を見据えた方言の研究を続けていきたい。

であろう。

4. おわりに

一口に方言地理学の考察といっても、その手法は様々である。

国立国語研究所がおこなった『日本方言地図』や『方言文法全国地図』のような全国規模の調査とその報告は、日本列島という言語連続体のつながりと分断を概観するには非常に有用な研究である反面、やはり地点がどうしても粗くなってしまおうという難点も否めない。一方、糸魚川調査に代表されるような、地形と語形の分布をきちんと見ていくことの重要性は、広域で人が行き交うようになった今日においても、なお薄れていないことはいままでもない。

では、今回おこなった調査・報告は、どのような意味を持つのであろうか。今回の調査は、上に挙げた2つの金字塔に及ばないことは言うまでもないが、それなりの意味はある。それは、岐阜と愛知の2県で、100地点以上、ものによっては400地点以上

【付記】

本考察は、平成19年度 岐阜大学活性化経費（教育）による研究の成果の一部である。

【参考文献】

- 愛知県教育委員会編 (1985)『愛知のことば—愛知県方言緊急調査報告書—』
江端義夫 (1977)「中部地方方言の推量表現の分布について」『國語學』110
黒田鑛一編『愛知縣女子師範學校郷土研究紀要第一輯 愛知縣方言集』名古屋有信社
芥子川律治 (1971)『名古屋方言の研究』泰文堂
国立国語研究所編 (1991)『方言文法全国地図2』
国立国語研究所編 (1994)『方言文法全国地図3』
国立国語研究所編 (1999)『方言文法全国地図4』
真田信治 (2002)『方言の日本地図 ことばの旅』講談社+α新書
瀬戸重次郎 (1934)『岐阜県方言集成』大衆書房
彦坂佳宣 (1992)「東海西部地方の推量辞をめぐって—愛知県方言の分布と歴史ノート(8)—」『名古屋・方言研究会会報』9
彦坂佳宣 (1994)「東海西部地方における推量辞の分布と歴史」『國語學』179
彦坂佳宣 (1997)『尾張近辺を主とする近世期方言の研究』和泉書院
馬瀬良雄 (1992)『長野県史方言編』長野県史刊行会
山田達也・丹羽一彌 (1989)『愛知県の方言』文化財図書刊行会
山田達也・山口幸洋・鏡味明克 (1992)『東海の方言散策』中日新聞本社
山田敏弘 (2001)「岐阜県方言の終助詞について—岐阜県方言文法体系記述への足がかりとして—」『岐阜大学教育学部研究報告人文科学編』50-1
山田敏弘 (2004)「岐阜県方言における否定表現」『岐阜大学教育学部研究報告人文科学編』52-1
山田敏弘 (2005)『ぎふ・ことばの研究ノート第4集 岐阜大学生のことばの統計的分析① ～品詞・活用, 格, ヴォイス, アスペクト・テンス, 否定の特徴～』私家版
山田敏弘 (2007a)『みんなで使おっけ! 岐阜のことば いっしょに調べよまい 日本のことば』岐阜大学教養教育言語学I教科書
山田敏弘編 (2007b)「岐阜・愛知の若年層方言について1～遊びのことば・学校のことば・オノマトペ」『岐阜大学教育学部研究報告人文科学編』55-1
吉川利明・山口幸洋 (1972)『豊橋地方の方言』豊橋文化協会